

「気」が句頭に位置する慣用句について
 —慣用句教材を編纂する手がかりとしての—考察—

蔡 玉琳・仙波 光明・王 敏東

Idiom starting with 「Ki(気)」

—Note to composing textbook for idiom—

TSAI Yu-lin ; SENBA Mitsuaki ; WANG Ming-tung

Abstract

《国語学研究事典》(1977) defined idiom as “combination of a few words to form an expression for commonly accepted meaning”. Idiom comprised expression of metaphor, presenting suitable materials to understand life and thoughts of Japanese.

Foreign learners cannot directly comprehend the meaning of idiom. Textbooks that categorize idiom into upper, middle and lower levers, or marked the frequency of use for them should be of great assistance to those foreign learners when learning Japanese.

This study aims at (1) extracting idiom from a few dictionaries, (2) analyzing composition of these idioms, (3) examining status of these idioms in textbooks, (4) investigating how these idioms were applied in newspapers.

The outcome of this study should provide guidelines for composing textbooks for idiom.

要旨

日本語の慣用句は「いくつかの語を続けて、ある特定の意味を表すことが習慣的に行われている表現」(『国語学研究事典』(1977))と定義されている。また、慣用的な言い回しをも含み、比喩的なものが多く、日本の生活・性向・発想

を探る格好の材料となる。

このような状況により、外国人が日本語の慣用句を勉強する際には、字面をそのまま受けとめることはできても即座に意味などを理解するのは困難である。しかし、慣用句を初・中・上級に分けたり、または常用か否かなどの情報を示したりした辞書や教材はめったにない。したがって、何らかの基準で慣用句の難易度、使用頻度、使用上の注意点などを提示した教材があれば、外国人が日本語の慣用句を勉強する上で大いに参考になると思われる。

本研究は以上のことに基づき、①多くの辞書に収録された慣用句を抽出し、②慣用句の構成を分析し、③慣用句が教材に取り入れられている様子を検討し、④慣用句の新聞での実際の使用状況（回数および形態）を調べた。

この調査結果が慣用句教材の編纂や導入の順番を検討する上で役立てば幸いである。

1、はじめに

日本語の慣用句は「いくつかの語を続けて、ある特定の意味を表すことが習慣的に行われている表現」（『国語学研究事典』（1977））¹と定義されている。また、慣用的な言い回しまでを含み、比喩的なものが多い。慣用語、と言われることもある²。もともと気がきいた語呂のよい新鮮な言い回しとして誕生したが、一般に受けて繰り返し使用され、長い年月に耐ええた卓越した表現（その民族の長い間の知恵や発想が如実に表されている）だから、各民族の生活・性向・発想を探るかっこうの材料となる³。

このような状況により、外国人が日本語の慣用句を勉強しようとしても、字面をそのまま受けとめるだけで、即座に意味などを理解するところまではなかなかいかないのが常である。しかし、辞書、教材などで慣用句を初・中・上級に分けたり、または常用か否かなどの情報を示したりするというようなことはめったにない。したがって、何らかの基準で慣用句の簡易度、使用頻度、使用上の制限などを提示した教材があったなら、外国人が日本語の慣用句を勉強する上で大いに

¹ または「二つ以上の単語や語句の結びつきに、ある固定した意味を表すものをする」（『日本文法大辞典』（1971）、「二語以上が結合し、その全体が一つの意味を表すようになって固定したもの。」「二語以上が、きまった結びつきしかししない表現。』（『大辞林』<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E6%85%A3%E7%94%A8%E5%8F%A5&dtype=0&dname=0ss&stype=0&pagenum=1>）など、似たような定義がある。

² たとえば『日本国語大辞典』（2001 二版）、『大辞泉』など。

³ 山口仲美（<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E6%85%A3%E7%94%A8%E5%8F%A5/>）に基づき筆者によって改めて整理。

参考になると思われる。

本稿は以上のことに基づき、多くの辞書に収録された慣用句を抽出し、これらの慣用句の新聞での実際の使用状況（回数および形態）を調べたものである。この調査結果が慣用句教材の編纂や導入順序の検討に役立てられれば幸いである。

今回の調査では、辞書としてオンライン辞書の『大辞泉』（23万余語を収録）、『大辞林』（23万3000語を収録）、同じくオンラインで調べられ、信憑性が高い『日本国語大辞典』（五十万項目、百万用例を収録）、および新聞として『読売新聞』（2009年1月1日～2010年7月10日「全国版」；「ヨミダス歴史館」を使用）、を資料として用いた。また、今回取り上げた慣用句は、「気」が句頭に位置するものとした。「気」が句頭に位置する慣用句を選んだのは、「気」が抽象的で理解しにくいと考えられる上、句頭に位置するものだけでも数が多い等の理由があげられる。

2、慣用句に関する先行研究

慣用句については、前節で触れた辞書における簡潔な定義の他、『国語学大辞典』（1993八版：207）では「…日本で慣用句というのは、いつでも二つ以上の単語が一続きに、または、相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表わすものをさす。（1）その構成要素の意味からだけでは、その句全体の意味が理解できないような表現、すなわち、もとの意味が拡張または転用され、あるいは、比喩的に用いられて固定した表現（例「人をあごで使う」）、（2）その構成要素になる語が、その語結合としてしか用いられないような表現（例「間髪を入れず」）、（3）普通の文法や論理的な意味からは説明できないような表現（例「へそくり」）などを慣用句ということもある。」と詳しく述べられている。

宮地（1994：238）は慣用句を「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だという程度のところ」で一般的な共通理解だとした上で⁴、品詞の特徴、語彙の特徴、形式上の特徴、そして形式上の制限といったいろいろな角度から慣用句について検討した。

また、日本語教育の立場からは、たとえばキロワ スベトラ（2003）が14種の言語による慣用句の対照表を作った。中川（2004）は認知の視点で慣用句を検討した。工藤（2001）は同志社大学で使われている日本語教材⁵を調査対象として、

⁴ この点については米川・大谷伊（2008三版）などにも広く採用されている。

⁵ 『みんなの日本語初級 I. II』（1998、スリーエーネットワーク）、『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE 1～3 DRILLS』（1994～1997、凡人社）、『中級日本語』（東京外国語大学留学生日

外来語が含まれている慣用句を取り出した⁶。ミン ダニー・佐野 (2001) はアメリカ人学習者の立場で、新聞や小説で常用された慣用句を調査し、習得しにくい原因、参考書の特徴などについて検討している。佐藤 (2007) は宮地 (1982 初版、1994 四版) に提示されている「常用慣用句一覧」と、日本語辞典⁷、慣用句辞典⁸を資料とし、『一万語語彙分類集』(1995) のような“重要な”慣用句を見出そうとしている⁹。張 (1995) は日本語慣用句を中国語に訳す際にぶつかる問題と改善策の提案について触れている¹⁰。藤巻 (2007) は構成要素間の結合状態がどのくらい緊密であるかについて検討している。

上述した研究は慣用句の本質を探り、認知、調査などを通して、学習者の理解、記憶を助け使用上の参考になったと思われる。

3、台湾の各図書館に所蔵されている日本語慣用句の書籍

2010年6月現在台湾の各図書館¹¹に所蔵されている資料のうち、書名に「慣用句」または「慣用語」が含まれる日本語の書籍を年代順に示すと付録の通りである。

付録に示すように、時代的に見ると、八十年代には日本における慣用句の研究はまだ初歩的な段階にあり¹²、台湾で出版された慣用句のものは、慣用句とその中国語訳のリストのようなものが最初だった。また、書籍の性質や使用対象などは必ずしも各書籍資料に明記されているとは限らないが、台湾での出版なので、中国語による説明や日本語の例文に対する中国訳が付されているのは“教材”としての利用の意図が見える。なお、全体的に辞書が少なくない。辞書にも“中国語”が大きく役割を果たしているものが何点か見られる。(12)と(13)はもともと日本で作成されたものであるが、台湾の大新書局が中国語の注釈を若干入れて、台湾で改めて出版したものである。専ら外国人日本語学習者を対象とし、「説明

本語教育センター、1994、凡人社)、『テーマ別 中級から学ぶ日本語』(中井礼子等、1991、研究社)、『上級日本語』(東京外国語大学留学生日本語教育センター、1998、凡人社)、『テーマ別 上級から学ぶ日本語』(松田浩志等、1994)。

⁶ 「レッテルを貼る」など。

⁷ 『新レインボー小学国語辞典』(金田一春彦等、2005、学研)、『小学館学習国語新辞典』(金田一京助等、2006、小学館)。

⁸ 『日本語慣用句辞典』(米川明彦等、2005、東京堂出版)、『小学生の漫画慣用句辞典』(金田一秀穂、2005、学研)。

⁹ しかし、その後の研究成果は見当たらない。

¹⁰ しかし、全面的な検討ではない。

¹¹ (台湾) 国家図書館および、図書館間相互協力に参加する76所の図書館である。

¹² 宮地 (1982) の「はしがき」に「その調査・研究には未開拓なところが大きい」とある。

「例文」「練習問題」がそろっているのは(12)、(13)、(23)と(26)である。

例文の出典に関しては、(11)、(24)などのような、文学作品、新聞などから実例を取り入れてあるものの他、ほとんど明示されていない。

4、「気」の意味・概念

『日本国語大辞典』（2001 二版）によると、「気」は「〔名〕変化、流動する自然現象。または、その自然現象を起こす本体。風雨、寒暑など、天地間に現われる自然現象。／陰暦で一年を二四分した一期、一五日をいう。「二十四気」／万物を生育する天地の精。天地にみなぎっている元気。／空気。大気。／そのもの特有の味わい、かおり。香氣。／生命、精神、心の動きなどについていう。自然の気と関係があると考えられていた。／いき。呼吸。／精気。生活力。／心のはたらき。意識。／精神の傾向。気だて。気ごころ。／緊張した、さかんな精神。気力。氣勢。／何事かをしようとする心のはたらき。つもり。考え。意志。／あれこれと考える心。心配。／根気。気根。／興味、関心。また、人を恋慕う気持。／十分にはっきりとはしないが、そうではないかと思う考え。／取引所で、気配の事。人氣。／〔接尾〕体言、動詞の連用形、形容詞の語幹などに付いて、主に形容動詞の語幹を作る。外から見ていかにもそのようだという意を表わす。／体言、動詞の連体形などに付いて、推量の意を表わす。らしい。」の意味を持つという¹³。

¹³ ちなみに、『大辞泉』における「気」の語釈は「1 生命・意識・心などの状態や働き。①息。呼吸。「一が詰まりそうな部屋」②意識。「一を失う」③物事に反応する心の働き。「一を静める」④精神の傾向。気質。「一が強い」⑤精神の盛り上がり。氣勢。「復興の一がみなぎる」⑥気分。気持ち。「一が楽だ」「一が乗らない」⑦あれこれ考える心の動き。心遣い。心配。「どうにも一になる」⑧物事にひきつけられたり、人を恋慕ったりする気持ち。興味。関心。「彼女が一がある」⑨何かをしようとする、また何かしたいと思う心の動き。つもり。「どうする一だ」「やる一がある」2 天地に生じる自然現象。空気・大気や、水蒸気などの気体。「山の一」3 あたりに漂う雰囲気。心に感じる周囲のようす。「陰鬱(いんうつ)な一が漂う」4 ある物がもっている特有の香りや風味。「一の抜けたビール」5 昔、中国で1年を24分した一つの、15日間。さらに3分した一つを候といい、気は3候からなる。節気。」で、『大辞林』には「(1) 生まれつきもっている心の傾向。性質。性格。(2) 物事に積極的に立ち向かう心の動き。意欲。(3) 物事に引きつけられる心の動き。関心。(4) 物事に対してもつ、または物事に影響を受けて変わる感情。情緒。(5) 外界を認識し、外界と自分との関係を理解する心のはたらき。意識。(6) 物事をうまく運ぶために、状況を的確にとらえる注意力。配慮。(7) 物事をなしとげるために心を支え動かす力。気力。(8) ある物が含みもっていて、その物を生かしている目に見えないもの。特に、味わいや香りをいう。(9) 目には見えないが、空間に立ちこめているもの。精気。(10) その場に広がっている感じ。雰囲気。(連体修飾語を受けて)(ア) これから何かをしようという気持ち。つもり。(イ) 実際はそうでないのに、そうしたような気持ち。つもり。(ウ) その時々の

このように、「気」は多義で、抽象的な意味を多く含んでいる。

4、「気」が句頭に位置する慣用句

4・1、辞書に収録されている状況

辞書に収録されるか否かは専門家による判断が大きい。多くの辞書に収録されたということは、ある意味で多くの専門家に重要な項目だと認められたことである。

「気」が慣用句の句頭に位置するものは、『大辞泉』に94、『大辞林』に81、『日本国語大辞典』（2001二版）に245項目もある。この3辞書のいずれにも収録されているのは71である。以下、この71の慣用句を中心に分析する。

4・2、「気」が句頭に位置する慣用句の構成

まず、『大辞泉』、『大辞林』、『日本国語大辞典』（2001二版）の3辞書のいずれにも収録されている、「気」が句頭に位置する71の慣用句の構成およびそのような構成となっている慣用句の数を整理すると、表1のようになる。また、表記は『日本国語大辞典』（2001二版）にしたがう。

表1 「気」が句頭に位置する慣用句の構成

構成		数		71の慣用句における%		慣用句例
気+助詞+名詞	気+の+名詞	3	5	4.2%	7%	気の薬
	気+は+名詞	1		1.4%		気は心
	気+が+名詞	1		1.4%		気が気でない
気+助詞+形容詞	気+が+形容詞	10	10	14%	14%	気がいい
気+助詞+動詞	気+が+動詞	27	54	38%	76%	気が合う
	気+に+動詞	9		12.7%		気に入る
	気+を+動詞	18		25.3%		気を入れる
その他	気+形容詞+動詞	2	2	3%	3%	気を能くする

上表で分かるように、「気+が+動詞」「気+を+動詞」といったような「気」

心の状態。気持ち。(12) 漢方で、血(けつ)とともに体内の経絡を循行する生命力の根源とされるもの。無形であるが、有形の血と一体となって生理機能全般をつかさどるとされる。(13) 宋学で、「理」が万有を支配する原理であるのに対して、万物を形成する元素を「気」という。[補説]「こころ」という語が精神活動を行う本体的なものを指すのに対して、「気」はその「こころ」の状態・反応など現象的な面をいう傾向が強い。「気は心」という言葉も、表面的な「気」のはたらかきは本体としての「心」の表れであるという考え方に基づく」とある。

と動詞との組み合わせの慣用句が最も多い。以下順次「気+が+形容詞」「気+に+動詞」となっている¹⁴。

4・3、“基礎慣用句”

主に専門家によって選び出された基礎語、或いは何かの調査で使用率が高いものとして得られた基本語または教育基礎語（または基本語）については従来盛んに研究されている。が、慣用句について触れたものは『日本語教育基本語彙七種比較対照表』（1987（2刷）、国立国語研究所）、『一万語語彙分類集』（1995再版）、『日本語能力試験出題基準』（1994、2002改定版）ぐらいで少ないように思われる。

この節（4・3）では“基礎慣用句”の目安として、以下、4・1で取り上げた3辞書のいずれにも収録されている、「気」が句頭に位置する71の慣用句が、4・3の冒頭で挙げた語彙表や、実際の教材に取り上げられた状況を整理する。教材としては、初・中級と上級の2冊（(12)、(13)）に分かれている『すぐに使える実践日本語シリーズ 慣用句』（田仲正江・真柄奈保子、1996、大新書局）を使用した¹⁵。

結果は表2のようになった。

表2 “基礎慣用句”の目安

資料		教材 ¹⁶		語彙表		
		慣用句 初・中級	慣用句 上級	日本語教育基本語彙七種比較対照表	一万語語彙分類集	日本語能力試験出題基準
慣用句 気～ 形容	気がいい	X	X	X	X	X
	気が多い	V	X	X	X	X

¹⁴ 『日本国語大辞典』（2001二版）に収録されている、「気」が句頭に位置する245の慣用句の構成および構成ごとの慣用句の数を整理すると、「気+助詞+動詞」の慣用句が多く、また、王（1992）「日語慣用語簡介」における「從結構上來看、動詞慣用語為數最多、其中的“名詞+動詞”形式約占3/4」という身体語彙が含まれる慣用句全体の傾向にも大体近い。

¹⁵ 付録に提示されている(21)明治書院編集部（2002）『慣用句・ことわざ・故事成語』に取り入れられている慣用句は難易度3段階に分けられているが、今回の調査範囲内の慣用句が収録されていないため、本研究のこの部分の参考になれない。

¹⁶ 『すぐに使える実践日本語シリーズ 慣用句 初・中級』に「気が強い」「気が弱い」、『すぐに使える実践日本語シリーズ 慣用句 上級』に「気が休まる」「気が鎮める」が取り上げられているが、「気が休まる」は『大辞泉』『大辞林』のいずれにも、「気が強い」「気が弱い」「気を鎮める」は『大辞林』に収録されていない。

詞	気が大きい	X	X	X	X	X
	気が重い	V	X	X	X	X
	気が小さい	X	X	X	X	X
	気が無い	X	X	X	X	X
	気が早い	X	X	X	X	X
	気が長い	V	X	X	X	X
	気が短い	V	X	X	X	X
気～ 動詞	気が若い	X	X	X	X	X
	気が合う	X	X	X	X	X
	気がある	X	X	X	X	X
	気が勝つ	X	X	X	X	X
	気が利く	X	V	X	X	X
	気が差す	X	X	X	X	X
	気が知れない	X	X	X	X	X
	気が進まない	X	X	X	X	X
	気が済む	X	V	X	X	X
	気がする	X	X	X	X	X
	気が急ぐ	X	X	X	X	X
	気が立つ	X	X	X	X	△ (「気立て」旧1級)
	気が散る	V	X	X	X	X
	気が尽きる	X	X	X	X	X
	気が付く	V	X	△ (「気付く」)	△ (「気付く」)	△ (「気付く」2級)
	気が詰まる	X	X	X	X	X
	気が咎める	X	V	X	X	X
	気が抜ける	X	V	X	X	X
	気が乗る	X	X	X	X	X
	気が張る	X	X	X	X	X
	気が晴れる	X	X	X	X	X
	気が触れる	X	X	X	X	X
	気が引ける	X	X	X	X	X
	気が減る	X	X	X	X	X
	気が紛れる	X	X	X	X	△ (「気紛れ」1級)
	気が回る	X	X	X	X	X
	気が向く	X	X	X	X	X
	気が揉める	X	X	X	X	X
	気に入る	V	X	X	V	2級
	気に掛かる	X	X	△ (「気掛かり」)	△ (「気掛かり」)	X
	気に掛ける	X	V	X	X	X

	気に食わない	X	V	X	X	X
	気に障る	X	V	X	△（「気障」）	△（「気障」 1級）
	気にする	V	X	X	X	X
	気にとめる	X	X	X	X	X
	気になる	X	X	X	X	X
	気に病む	X	X	X	X	X
	気を入れる	X	X	X	X	X
	気を失う	V	X	X	X	X
	気を落とす	X	V	X	X	X
	気を兼ねる	X	X	△（「気兼ね」）	△（「気兼ね」）	△（「気兼ね」 1級）
	気を利かせる	X	V	X	X	X
	気を配る	X	X	X	△（「気配り」）	X
	気を使う	V	X	△（「気遣う」）	X	X
	気を付ける	X	X	V	V	2級
	気を取られる	X	X	△（「気取る」）	△（「気取る」）	X
	気を取り直す	X	V	X	X	X
	気を抜く	X	X	X	X	X
	気を吐く	X	X	X	X	X
	気を張る	X	X	X	X	X
	気を引く	X	X	X	X	X
	気を回す	X	X	X	X	X
	気を持たせる	X	X	X	X	X
	気を揉む	X	X	X	X	X
	気を許す	X	X	X	X	X
	気を能くする	X	X	X	X	X
気＋ 形容 詞＋ 動詞	気が遠くなる	V	X	X	X	X
気＋ が＋ 名詞	気が気でない	V	V	X	X	X
気＋ は＋	気は心	X	X	X	X	X

名詞						
気+ の+ 名詞	気の薬	X	X	X	X	X
	気の毒	X	X	V	V	2級
	気の病	X	X	X	X	X

* 「V」は収録、「X」は未収録を表す。また、該当慣用句と深い関連があると思われる表現は「△」で示す。なお、日本語能力試験は級数を示す。以下同様。

表2は“基礎慣用句”の1つのヒントとして考えられよう。

4・4、“基本慣用句”——「気」が句頭に位置する慣用句が新聞に用いられている様子

これら「気」が句頭に位置する慣用句の使用率を察知するため、慣用句が実際に新聞にどう用いられているかを調査した。使用回数が多いものは“基本慣用句”としての基準の1つと定めてよかろう。実際には2009年1月1日～2010年7月10日の『読売新聞』（「全国版」）での使用状況を調査した。

まず、使用回数に関する結果は表3のようになっている。

表3 「気」が句頭に位置する慣用句が新聞に用いられた回数および順位

ランク	慣用句 (回数)
百回以上 (8項目)	気になる (1928)、気がする (1251)、気に入る (718)、気にする (555)、気を付ける (435)、気を引く (383)、気が付く (260)、気を配る (192)
50～100回 (6項目)	気の毒 (88)、気がある (75)、気を取られる (68)、気を揉む (67)、気を吐く (56)、気に掛かる (50)
10～49回 (17項目)	気が無い (46)、気が抜ける (33)、気が済む (32)、気を失う (32)、気を取り直す (32)、気に掛ける (26)、気にとめる (25)、気を使う (24)、気を能くする (19)、気を抜く (18)、気が遠くなる (17)、気が合う (15)、気が引ける (15)、気が気でない (15)、気が重い (14)、気に食わない (12)、気に病む (10)
1～9回 (25項目)	気が進まない (9)、気が向く (9)、気に障る (9)、気が早い (8)、気を許す (8)、気が小さい (6)、気が散る (6)、気を持たせる (6)、気が短い (5)、気が回る (5)、気が晴れる (4)、気を回す (4)、気が利く (3)、気が触れる (3)、気が紛れる (3)、気が大きい (2)、気が張る (2)、気に入れる (2)、気を兼ねる (2)、気が若い (1)、気が咎める (1)、気が乗る (1)、気を利かせる (1)、気は心 (1)、気の病 (1)
0回 (15項目)	気がいい、気が多い、気が長い、気が勝つ、気が差す、気が知れない、気が急ぐ、気が立つ、気が尽きる、気が詰まる、気が減る、気が揉める、気を落とす、気を張る、気の薬

表3で、使用回数が多ければ多いほど、その語が教材編纂または教授する際に

優先的に取り入れられるべきであろう。

また、これらの慣用句は果たして常に慣用句の“原形”¹⁷で用いられているだろうか。もし完全にそうだと言い切れなかったら、どのような形が常用されているか、というような情報を教材に入れたら学習上の大きな参考になるに違いない。

そのようなことを究明するため、以下、慣用句が“原形”または“原形以外の何らかの変形”¹⁸で新聞に使われている回数をまとめると、表4ようになる。

表4 「気」が句頭に位置する慣用句が新聞に用いられている様子

	慣用句	原形	原形以外の何らかの変形	計
気～形容詞	気がいい	0	0	0
	気が多い	0	0	0
	気が大きい	0	2	2
	気が重い	8	6	14
	気が小さい	3	3	6
	気が無い	37	9	46
	気が早い	8	0	8
	気が長い	0	0	0
	気が短い	1	4	5
気が若い	0	1	1	
気～動詞	気が合う	11	4	15
	気がある	30	45	75
	気が勝つ	0	0	0
	気が利く	1	2	3
	気が差す	0	0	0
	気が知れない	0	0	0
	気が進まない	6	3	9
	気が済む	8	24	32
	気がする	601	650	1251
	気が急く	0	0	0
気が立つ	0	0	0	

¹⁷ 「原形」は各表の「慣用句」の欄で提示されている形を指す。また、もともと「～ない」という形の慣用句（本稿における「気が無い」「気が知れない」「気が進まない」など）の「～ない」または「～なかった」の欄はそれぞれ「～なくない」「～なくなかった」の形となる。

¹⁸ “原形以外の何らかの変形”は、動詞を例にすれば、未然、連用、仮定、命令などいわゆる活用変化が考えられるが、今回は『新日本語の基礎』（海外技術者研修協会）、『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）など多くの外国人向けの日本語教材で初級の段階で導入されている「（～ます／～たい）連用形」「た形」「ない形」「～なかった」「辞書形」のみについて検討する。詳細は後述する。

気が散る	4	2	6
気が尽きる	0	0	0
気が付く	88	172	260
気が詰まる	0	0	0
気が咎める	0	1	1
気が抜ける	3	30	33
気が乗る	0	1	1
気が張る	0	2	2
気が晴れる	1	3	4
気が触れる	1	2	3
気が引ける	8	7	15
気が減る	0	0	0
気が紛れる	1	2	3
気が回る	0	5	5
気が向く	1	8	9
気が揉める	0	0	0
気に入る	14	704	718
気に掛かる	41	9	50
気に掛ける	16	10	26
気に食わない	8	4	12
気に障る	8	1	9
気にする	166	389	555
気にとめる	5	20	25
気になる	1084	844	1928
気に病む	6	4	10
気を入れる	0	2	2
気を失う	3	29	32
気を落とす	0	0	0
気を兼ねる	0	2	2
気を利かせる	0	1	1
気を配る	64	128	192
気を使う	10	14	24
気を付ける	105	330	435
気を取られる	8	60	68
気を取り直す	3	29	32
気を抜く	10	8	18
気を吐く	14	42	56
気を張る	0	0	0
気を引く	9	374	383
気を回す	1	3	4
気を持たせる	2	4	6
気を揉む	53	14	67

	気を許す	1	7	8
	気を能くする	0	19	19
気＋形容詞＋動詞	気が遠くなる	15	2	17
気＋が＋名詞	気が気でない	10	5	15
気＋は＋名詞	気は心	1	0	1
気＋の＋名詞	気の葉	0	0	0
	気の毒	88	0	88
	気の病	1	0	1

*各欄における数字は出現回数を表す。

まず、表4で網掛けを施した「気が早い」「気は心」「気の毒」「気の病」は今回調査した新聞の範囲内では慣用句そのままの形でしか用いられていないことが分かる。つまり、これらの慣用句はそのままの形で用いられる率が高い慣用句だと考えられるので、教科書にそのような根拠のある情報を提示した方がよい。

一方、表4で“原形以外の何らかの変形”で使われている慣用句がかなり多いことも分かった。とくに、表4で二重線で囲んだ慣用句の「気が済む」「気が付く」「気が抜ける」「気に入る」「気を失う」「気を配る」「気を付ける」「気を取られる」「気を取り直す」「気を引く」「気を能くする」などは“原形”よりむしろ“原形以外の何らかの変形”で使われることが多い。

また、その変形および使用回数は表5で示す。

表5 慣用句の使用形態

	慣用句	原形	～た	連用形	～ない	～なかった	計
気～ 形容 詞	気がいい	0	0	0	0	0	0
	気が多い	0	0	0	0	0	0
	気が大きい	0	0	2	0	0	2
	気が重い	8	0	6	0	0	14
	気が小さい	3	1	2	0	0	6
	気が無い	37	1	8	0	0	46
	気が早い	8	0	0	0	0	8
	気が長い	0	0	0	0	0	0
	気が短い	1	0	4	0	0	5
	気が若い	0	0	1	0	0	1
気～ 動詞	気が合う	11	1	3	0	0	15
	気がある	30	4	3	37	1	75
	気が勝つ	0	0	0	0	0	0
	気が利く	1	0	0	2	0	3
	気が差す	0	0	0	0	0	0

気が知れない	0	0	0	0	0	0
気が進まない	6	3	0	0	0	9
気が済む	8	1	3	19	1	32
気がする	601	284	303	49	14	1251
気が急ぐ	0	0	0	0	0	0
気が立つ	0	0	0	0	0	0
気が散る	4	0	2	0	0	6
気が尽きる	0	0	0	0	0	0
気が付く	88	113	24	19	16	260
気が詰まる	0	0	0	0	0	0
気が咎める	0	1	0	0	0	1
気が抜ける	3	5	0	22	3	33
気が乗る	0	0	0	1	0	1
気が張る	0	0	2	0	0	2
気が晴れる	1	2	1	0	0	4
気が触れる	1	2	0	0	0	3
気が引ける	8	4	2	0	1	15
気が減る	0	0	0	0	0	0
気が紛れる	1	1	0	1	0	3
気が回る	0	0	1	2	2	5
気が向く	1	8	0	0	0	9
気が揉める	0	0	0	0	0	0
気に入る	14	209	444	45	6	718
気に掛かる	41	4	5	0	0	50
気に掛ける	16	7	0	2	1	26
気に食わない	8	4	0	0	0	12
気に障る	8	0	1	0	0	9
気にする	166	14	251	118	6	555
気にとめる	5	0	10	6	4	25
気になる	1084	248	498	72	26	1928
気に病む	6	2	2	0	0	10
気を入れる	0	0	2	0	0	2
気を失う	3	13	16	0	0	32
気を落とす	0	0	0	0	0	0
気を兼ねる	0	0	2	0	0	2
気を利かせる	0	1	0	0	0	1
気を配る	64	25	102	1	0	192
気を使う	10	2	12	0	0	24
気を付ける	105	28	289	13	0	435

	気を取られる	8	6	53	1	0	68
	気を取り直す	3	8	21	0	0	32
	気を抜く	10	5	0	2	1	18
	気を吐く	14	38	4	0	0	56
	気を張る	0	0	0	0	0	0
	気を引く	9	3	371 ¹⁹	0	0	383
	気を回す	1	1	2	0	0	4
	気を持たせる	2	0	4	0	0	6
	気を揉む	53	10	4	0	0	67
	気を許す	1	2	5	0	0	8
	気を能くする	0	7	12	0	0	19
気 + 形容詞 + 動詞	気が遠くなる	15	0	2	0	0	17
気 + が + 名詞	気が気でない	10	2	3	0	0	15
気 + は + 名詞	気は心	1	0	0	0	0	1
気 + の + 名詞	気の薬	0	0	0	0	0	0
	気の毒	88	0	0	0	0	88
	気の病	1	0	0	0	0	1

*各欄における数字は出現回数を表す。

ゴシック体で示すのは比較的多く用いられている変形である。よく「た形」で用いられている慣用句に「気が付く」「気を吐く」などがある。「連用形」が多く用いられているのは形容詞慣用句の「気が大きい」「気が短い」「気が若い」と動詞慣用句の「気が張る」「気に入る」「気にする」「気を入れる」「気を失う」「気を兼ねる」「気を配る」「気を使う」「気を付ける」「気を取られる」「気を取り直す」「気を引く」「気を回す」「気を持たせる」「気を許す」「気を能くする」である。また、「気が回る」は「～なかった形」も多く使われている。

それに対して、波線に囲まれており、「ない形」と「なかった形」の欄で斜めの数字「0」で示しているのは今回の調査範囲内で否定形（「ない形」と「なか

¹⁹ 300 あまりの「気を引き締め～」の例が含まれている。

った形)が1度も現れていない慣用句である。そのようなものに、「気が大きい」「気が重い」「気が小さい」「気が無い」「気が早い」「気が短い」「気が若い」「気が合う」「気が進まない」「気が散る」「気が咎める」「気が張る」「気が晴れる」「気が触れる」「気が向く」「気に掛かる」「気に食わない」「気に障る」「気は心」「気を利かせる」「気を使う」「気を吐く」「気を引く」「気を回す」「気を持たせる」「気を揉む」「気を許す」「気を良くする」「気が遠くなる」「気が気でない」「気の毒」「気の病」があげられる。「気が大きい」「気が小さい」は互いに対義表現で、それで「気が～ない」という否定形はないのであろう。また、「気に食わない」「気が気でない」はいずれも、慣用句そのものに「～ない」という否定形が含まれており、肯定形の「気に食う」「気が気でである」は存在しない。

5、おわりに

本研究における考察により、以下のことが分かった。

- a. 「気」が句頭に位置する慣用句のうち前記の3辞書のいずれにも収録されているものは71である。
- b. その構成は「気が+動詞」(27句)、「気を+動詞」(18句)といったような「気」と動詞との組み合わせの慣用句が最も多い。以下順次「気が+形容詞」(10句)、「気に+動詞」(9句)となっている。
- c. 慣用句教材に取り入れられているものは26句ある。その中には、「気を鎮める」のような辞書に収録されていないものもある。逆に、「気の毒」などのように、3辞書のいずれにも収録されているが、教材に取り入れられていないものもある。
- d. 上記cのもののうち、たとえば『読売新聞』(2009年1月1日～2010年7月10日「全国版」)で「気を鎮める」は2回、「気の毒」は88回も用いられている。このような使用回数から見れば、「気を鎮める」よりも、「気の毒」を優先的に教材に取り入れることをすすめたい。
- e. 慣用句の新聞での使用状況(回数や形態)にはかなりの差が見られた。たとえば、「気が早い」などが常にもとの形で用いられているのに対して、「気が済まない」が「気が済む」より、「気が抜けない」も「気が抜ける」(または「気が抜けた」)より多用されている。
- f. 使用回数および使用形態が慣用句教材を編纂する際、どういう慣用句のどういう形を優先に取り入れるかの基準・参考に盛り込むべきだ考えられる。

この調査結果が慣用句教材の編纂や導入の順番を検討する上で役立てば幸いである。

参考文献（年代順）

- 土居光知（1933）『基礎日本語』六星館
- 坂本一郎（1943）『日本語基本語彙：幼年之部』明治圖書
- 佐藤喜代治（1977）『国語学研究事典』明治書院
- 宮地裕（1982 初版、1994 四版）『慣用句の意味と用法』明治書院
- 国立国語研究所（1987（2刷））『日本語教育基本語彙七種比較対照表』
- 王宏（1992）『日語慣用語例解手冊』鴻儒堂
- 日本語教育学会（1993）『日本語教育事典』大修館書店
- 国語学会（1993 八版）『国語学大辞典』東京堂
- 専門教育編集部（1995 再版）『一万語語彙分類集』宇田
- 張愛平（1995）「日本語・中国語の翻訳に於ける問題点について」『横浜国立大学留学生センター紀要』2
- 杉本つとむ・岩淵匡（1998 初版二刷）『日本語学辞典』おうふう
- 松原純一（1998）「現代日本語の慣用句—日本人の知恵—」『研究紀要 第一分冊 人文学部』9、聖徳大学人文学部
- 松原純一（1999）「現代日本語の慣用句（続）—日本人の知恵—」『研究紀要 第一分冊 人文学部』10、聖徳大学人文学部
- 工藤陽子（2001）「日本語教科書の外来語：同志社大学留学生別科で使用した教科書を例として」『同志社大学留学生別科紀要』創刊号
- ミン ダニー・佐野洋（2001）「日本語学習者のための慣用句データベースの作成：統計処理を用いた一手法の提案」『情報処理学会研究報告 コンピュータと教育研究会報告』2
- 国際交流基金・財団法人 日本国際教育協会（1994、2002 改訂版）『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 小池清治・キロワ スベトラ（2003）「第一部 慣用句の分類について（慣用句の分類とその応用）」『宇都宮大学国際学部研究論集』16
- キロワ スベトラ（2003）「第二部 14 か国語の慣用句の比較調査（慣用句の分類とその応用）」『宇都宮大学国際学部研究論集』16
- 中川純子（2004）「通時的・共時的語彙ネットワークにおける慣用句」『慶応義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』38
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店

- 佐藤理史 (2007) 「基本慣用句五種対照表の作成 (言語資源・文書分析)」『情報処理学会研究報告 自然言語処理研究会報告』35
- 藤巻一真 (2007) 「慣用句における移動と解釈の問題」『Scientific approaches to language』6
- 蔡明興 (2008) 「日本語における諺の意味とその中国語訳一身体語彙を含む諺を中心として」『台湾応用應用日語研究』5
- 『教育部重編国語辞典修訂本』<http://dict.revised.moe.edu.tw/>
- 『大辞泉』
(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?p=%E6%B0%97&enc=UTF-8&stype=0&dtype>)
- 『大辞林』
(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?p=%E6%B0%97&enc=UTF-8&stype=0&dtyps>)
- 日本国語大辞典編纂委員会 (2001 二版) 『日本国語大辞典』小学館
(<http://www.jkn21.com>)
- 山口仲美 「慣用句」『Yahoo!百科事典』
(<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E6%85%A3%E7%94%A8%E5%8F%A5/>)
- 『読売新聞』 (「ヨミダス歴史館」
<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

付録

記号	書籍資料	性質	収録慣用句(数など)	使用者対象の設定	配列	含まれる項目			その他	
						説明	例文	例文の中国語訳		図
(1)	左秀靈(1982)『日語慣用語手册』雄獅出版	学習書	数多くの文型を含む455項目	台湾人日本語学習者	五十音	・中国語による説明	V	V	X	
(2)	辻隆福(1982)『日本成語・諺語・慣用語大全』五南出版	学習書・辞書(1序言)・一般(日本語の)書籍(1序言)	日本の辞書と諺、成句、慣用語数千項目を選出した	台湾人日本語学習者	五十音	・諺、成句、慣用語の中国語訳	X	X	X	・比較などの注記や説明
(3)	宮地裕(1982)初版、1994四版『慣用語の意味と用法』明治学院	研究書	日常ごく普通に使用される慣用語(執筆者の自由な選定)	(日本語の研究・教育・学習上)	(伊解項目)五十音	・日本語による説明 ・文法 ・類義語句 ・参考(中国語・フランス語・韓国語語・タイ語)	V	X	X	・付説を置いたものがある
(4)	徐昌木(1983)『日・文成語・諺語・慣用語大全』大修書局	学習書	現在日本で通用されている成句、諺、格言などを含む5千余項目	日本語の学習に役立つ	五十音 ・中国語成語索引	・中国語による説明 ・類義語句 ・反義語句	X	X	X	
(5)	大修書局編集部(1989)『伊解日本語慣用語辭典』大修書局	辞書	日本人がよく用いる慣用語	台湾人日本語学習者	五十音	・中国語による説明	V	V	X	
(6)	飛田良文・呂玉新著(1989)『日本・中国慣用語対照辞典』南雲堂	辞書	日常生活によく使われている表現の違いを慣用語1365項目	日中慣用語の対照研究の一環	五十音 ・中国語ピンインのabc添付	・日本語による説明 ・対応している中国語の慣用語などを提示	V	V	V	
(7)	王宏(1992)『日語慣用語例解手冊』雄獅堂	学習書	約1551項目	中国人日本語学習者	キーボード(の)上に五十音	・中国語による説明	V	V	X	

1. 1995年に台湾商務印書館による内容が同じものも刊行されている。

(8)	白石大二(1993二八版)『国語 慣用句辞典』東京堂	辞書	(「はしがき」に)「著者 なりに、言語の慣用、 慣用句について述べて おいた」	(「書名に」国語が用い られているため)日本 人を対象と	(「序」に)「国語が用い られているため)日本 人を対象と	・構成要素別添 引	・出自・由来 ・(「はしがき」に)「言語構 成要素間の関係を、範例 的に説明しようとした」	V(出典)	X	X	
(9)	白石大二(1995一〇版)『国語 慣用句辞典』東京堂	辞書	(「序」に)「目的は、著 者の成句・慣用句の 研究の一期を画し、 先人の研究成果を回 顧して将来の展望を 志すところにある。」	小学校上級～中学生	・意味分類 ・五十音索引	・意味 ・構成されている要素(語) の尤々の意味	・意味(定義説明)	V(出典)	X	X	
(10)	道法明徳堂文芸辞書 (1994) 『慣用句みんでおどろい』実業 之日本社	学習書						V	X	V	
(11)	中嶋尚徳修(1996)『新選慣用句 の辞典』小学館	辞書	よく使われている慣用 句や慣用表現として 使われる熟語2850項 目	日本人	・五十音 ・キーワード五 十音索引	・解説、はがみによって語 源や故事		V(最近2 年間の新 聞・雑誌か らの実例5 00例)	X	X	・写真
(12)	田中江・間野泰保子共著(1 996)『すぐに使える実践日本 語シリーズ 慣用句 初・中 級』大修館	教科書	229項目	外国人日本語学習者	・意味分類 ・五十音索引	・意味・解説		V	X	V	・練習問題
(13)	田中江・間野泰保子共著(1 996)『すぐに使える実践日本 語シリーズ 慣用句 上級』大 新書局	教科書	一般によく使われて いる慣用句	外国人日本語学習者	・意味分類 ・五十音索引	V		V	X	V	・練習問題 ・参考

(19)	蔡锦雀(2000)『常用日語慣用語』尚景文化	学習書	一般によく使われている慣用語(俚筆者の選定)	台湾人日本語学習者	・五十音	・中国語による説明	V	V	V	
(20)	吉松志奈子・林徳勝(2001)『易解日語慣用語』三思堂文化	学習書		台湾人日本語学習者		・中国語による説明	V	V	X	
(21)	明治書院編集部(2002)『慣用語・ことわざ・故事・謎』明治書院	練習問題集	試験などのため、難易度の段階に分けられている。	日本人	・五十音索引	練習問題	V	X	V	
(22)	井上京雄(監修)・李強・劉曉梅・陳倩訳(2003)『日語慣用語辞典』江南圖書出版股份有限公司	辞書	日常生活でよく使われる慣用語を中心に、故事、謎、連語などを合計約700句	中国人日本語学習者	意味分類の 下(五十音) ・五十音索引	・用法 ・典故 ・類義語句 ・反義語句	V	V	X	・参考
(23)	華精集(2006)『日語慣用語速覧』上海譯文出版社	教科書	50項目	台湾人日本語学習者	ローマ別 ・五十音索引	・中国語による説明 ・典故など	V	V	X	・練習問題
(24)	米川明彦・大谷伊都子(2006)再版『日本語慣用語辞典』東京堂	辞書	現代日本語において比較対照される慣用語1563句	日本語を学習している外国人や(日本の)国語を勉強する高校生にも役立つように配慮した	五十音 ・キーワード索引	・実例 ・文型(構文)、文法上の制約、類義語句 ・見出しの慣用語に英語、中国語・韓国語で何と言 か、	V(文学作品 品や新聞 などより約 4800例)	V	X	・慣用語が 概説
(25)	姚敏久(2009)『慣用語辞彙日語活用辞典』大修館書店	辞書		日本語を母語とし、日本語学習者	・五十音	・中国語による説明	V	V	X	
(26)	王敏東・李華(2010)『漫畫上手日語慣用語』政良出版社	教科書	約200項目	外国人日本語学習者	意味分類の 下(五十音) ・五十音索引	・中国語による説明	V	V	V	練習問題